青空、海、死、少女

文目杳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青空、海、死、少女

【Ｎコード】
Ｎ８９７７Ｚ

【作者名】
文目杳

【あらすじ】
燦々と輝く太陽が印象に残る夏の頃である。少女は暇を持て余していた。逡巡する彼女は退屈に耐えきれず外へ飛び出す。

少女は無聊を持て余していた。心の片隅に幾ばくかの倦怠を書に耽ったり、友人にメールなどをして解消を試みた。しかし、その度彼女の心裏の退屈は積もっていった。ついには徒に家中を歩いてみたり、歌ってみたり、踊ってみたりしたが、結局満足のいくものではなかった。その無聊が背に圧し掛かり、息苦しさに耐えきれなくなった彼女は野良猫の如く家から飛び出すことにした。夏の中ごろ、太陽が燦然と輝いている昼のことである。

外に出るといっても、やはり彼女も女性だ。人前に出るならば、お洒落の一つや二つを振る舞いたくなる。しかし、外は肌を焦がす陽光、自分が気に入ってる服を汗で濡らしたくはないという思いがあった。だから、彼女は汚れても良い真っ白なワンピースを着ることにした。汚れても良いと思ってるが、決してその服装が嫌いという訳ではない。ただ、今の気分に似合っていて、汚れても許容できるというものが彼女の心にあった。実際彼女は白いワンピースは、普段は着けないものの、いつかは纏って出歩きたいと思っていた。その証左として今少女の身につけているのである。身仕舞を終えたら次は化粧だ。彼女は普段から厚化粧を好まなかった。淑女の嗜み程度の化粧を施し、彼女は家をから出ようと考えた。その一歩を踏み出そうと思うが、どうにも歯がゆい思いがあった。純白を身につけたほどほどの身繕いを姿見で確認する。納得のいかない様子でリビングまで往き、茶をコップに入れる。徐に意味不明な事を呟いてみる。茶を喫する。このまま日が暮れて荏苒(じんぜん)と一日を終わるのか。そう彼女の頭に浮かび、「それも乙なものだ」という諧謔と、無聊に負ける悔しさを仄かに感じた。やはりそれは気にくわないと思った彼女はどうにか打破をしようと足掻くが、思案を余らせた。このまま日が暮れるのだろうという憂鬱な眼差しを窓の外に向けた。太陽が絢爛と百熱を彩っていた。その時彼女は驟雨(しゅうう)に打たれたように

ハッとなる。彼女の眼に鉢植えの上にあるポトスが夏の日差しに照らされる姿が映った。彼女はそのイメージを瞼に保持しつつ部屋に駆け込む。クローゼットを開け、中を物色する。あれやこれ、てんやわんや、制服、私服、下着、果ては夏の情景には似合わないコートを探り分け、目的の代物を見つけ出す。それを身につけ姿見の前へやってくる。彼女の頭部には麦わら帽子が華奢に乗っていた。その姿を傍目に彼女は鼻歌交じりに家を飛び出した。

通りは想像の通りの暑さであった。隠微を感じさせる肌に張り付くような暑さ、汗が染みでる錯覚を覚えさせる夏の風景であった。しかし、彼女はそれに風情を見た。遠い情景がゆらゆら猶予う、木漏れ日を通ると涼しさが肌を掠める、蝉の鳴き声が耳を擽る、焼けた道路の臭いが馥郁と鼻を過る。全ては頭上で潤む炎天とその四隣の蒼穹が引き起こしていることだ、彼女は麦わらの奥から鳥瞰していた。

歩いていると彼女の目前を様々なものが通り過ぎた。汗を噴き出しながら自転車を漕いでる学生を見た。息を切らしながら彼は彼女の横を滑走していった。生憎今日は土曜日なので休日だが、恐らく彼のつけた制服から推察すると、彼は休日ながら学校のある学生だろう。そんな彼の遮二無二な様子に煽動されたかのように、彼女も額からの汗雫を感じた。次に石積み塀の上に敷かれた木漏れ日で寛ぐ猫を見た。気温の所為か萎えた様子で寝転んでいる。気だるい調子で欠伸をする。わずかの間、彼女はその様子を眺めていた。その彼女の視線に気づいた猫はこちらに目をやり、そして目を閉じてしまった。心なしか猫の陽気が映った気が起こる。麦わら帽子を弄り、前に続く晴天を設える提灯の連なりの如き雲の道を歩きだした。

彼女は歩調と同時に額の湿りを感じていた。頭部は帽子に隠れていようとも、やはりこの暑さなら汗を掻くものだ。頭部の汗するのを感じると、下着が忌まわしく体に張り付く様を意識するようになった。流石に炎天下で歩くのは無謀すぎただろうか、という懐疑が浮かんだ。しかしその疑問を振り払い麦わらを前に掲げ、歩みを止

めなかった。その日除けという後ろ盾だけでなく、これから先に進めば公園で休もうという算段が彼女にはあった。「途中でカフェに寄ってアイスコーヒーやアイスティーを嗜むのも好いかな。」そんな考えが彼女の帽子の裏で交錯していた。いくつもの企図が浮かんでは消えを繰り返し、ふとした拍子で空を眺めるとラピスラズリ色に輝いていた。それは彼女に幼少の滄溟（そうめい）を追憶させた。海面を浮き輪で漂う体感、舌に残る塩味、鼻を突く磯の香り、そして海から見る烈日。彼女にそんな気持ちが波打った。

彼女の目には天地が逆に映っていた。上から射す日が彼女の虹彩に映るべきものを幾何学模様として写し出す。三角、四角、多角、円、楕円、ついにはコンピュータグラフィクスでしか見れないような幾何学図形（フラクタル）が飛蚊の如く瞬く。光景が突然平面に射影された様に思えば、立体に戻る。歩いているが足が進んでいない、または景色が動かない、そんな錯覚が頭を幾らか彷徨う。ああ、このままでは不味い、倒れてしまう、なんとか休む場所を、頭を休まなければ。そんな面持ちでいた。焦燥が顔に現れる。しかし、幾らか足を進めると目の先に見えたそれに、彼女の顔色は期待の一色で溢れかえった。「自動販売機だ！」彼女は小走りに目的地に辿り着くと、財布からいくつかの銀子を出し、機械に入れて、ボタンを押す。闇雲に押したが、恐らく冷たい飲み物である事は確かだろう。取りだし口から缶の落ちる心地好い音を聞くと同時に、中のジュースの缶をとりだして、蓋を開けて喉に入れる。サラサラと甘味でいて一匙程度の辛さを含んだ液を嚥下する。喉から鼻へ進んだその香りからこれはスポーツドリンクだろう。一口目を咽喉から流すと僅かの余裕が出来たのか、彼女は手に握られたスチール缶について沈潜した。

やはり、スポーツドリンクを勢いで買ったのは失敗だっただろうか、甘みの無い茶や水を買えば良かったかもしれない。たしかに、先ほどまで汗を流していることを考えれば、塩分と水分を取れるこれは妙案に思えたが、自分の気分とは少しのずれを感じる。

そんなこんなを考えながら、缶に唇を付ける。桜色のルージュの

足跡が缶に残った。先ほどの不満は、舌の上で跋扈する清涼感を含んだ香りによって何処かへ追いやられてしまった。

少しは気が楽になったが、先ほどとは変わらないぼんやりとした様子で彼女は歩いていた。片手には陽光を反射し輝くスチール缶を持っている。もうすぐ歩けば公園だ。そこのベンチに座りながら少し寛ごう。そう思いながら彼女は路を歩いていた。交差点に差し掛かる。ここを越えれば目前にみえる公園に辿り着く。どうやら彼女が通りかかった時間帯は歩行者天国となっているらしく、彼女の目前を人が横切っていた。人の歩く一筋を眺めながら彼女の麦わらの奥に一つの考えが浮かんだ。左見右見すると目的のものが目に入った。そこへ足を運ぶ。彼女の足下に聳抜する歩道橋へと歩みを向けた。

態々歩道橋を使う必要はないんじゃないのか、こんな意識の中で遠回りをして道を渡るなんてどういう料簡しているんだ、そんな気持ちが彼女の心に木霊した。そもそも彼女のこの旅は突然萌芽した発想に従ったものなのだ。だから、今更そんな理外の理たる企画に従う、従わないの問題ではないである。馬鹿げたことを彼女は脂下がりに脳裏で弄んだ。

彼女が階段を登り終えれば開豁な世界広がった。下を覗けば人の鈴生りが蠕動するのを伺える。先ほどの一文字とは打って変わった斑消えと成っていた。上を眺めれば青空の海が広がり、それを太陽が照らす様が伺えた。旋毛の先にある手が届きそうな空に飛びこみたい気持ちに駆られた。鼻先から海面へ入り、白のワンピースを水に浸透させる。白い布から下着を通り、肌まで辿り着いた水は体に纏わりついた汗を流す。不図一陣の風が通り過ぎ、麦わら帽子を揺らした気がした。そんな思いを燻らせ、歩みを進める。彼女の影に隠れた人の連なりは未だ蠢いていた。

ベンチの上に一人の少女が座っている。片隅には2本のスチール缶が佇む。一本は青い清涼感を感じるスポーツドリンク、もう一本は老い緑の渋みの中に涼しさがある茶。彼女の真っ白なワンピース

は草色がかった木漏れ日に彩られている。彼女の顔に浮きあがる汗を横目で流しながら木陰で涼み、幾らかの物思いに耽る。彼女の口許の莞爾する様子以外は、麦わら帽子の廂に隠れて伺えなかった。

（了）

（後書き）

久しぶりに小説を書きたいと思ったので筆を走らせました。
今年の夏に感じた夏っぽいものを書きたいな、という思いを追憶して書きました。
季節無視も甚だしいですね。

元々少女が青空に手が届きそうなところにいて下は人混みという生と死のメタファーを表した絵がこの小説のバックにあります。
多分自分の中二妄想の産物だと思いますが
まあ、そこから紆余曲折得て、こんな感じになりました。
全然生と死とか物騒なメインテーマが薄れて、日常ほのぼの系になってますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8977z/

青空、海、死、少女

2011年12月28日04時47分発行